名古屋城大天守台西側の石列を巡って

村木　誠

キーワード
名古屋城　天守台石垣　石列　西小天守　縄張の計画変更

はじめに

名古屋城では、天守台及びその周辺石垣の現況把握のため、各種の調査を行ってきた。これらの調査の総合的な報告は現在作成中であるが、天守台周辺の内堀内で実施した発掘調査については、既に2冊の報告書を刊行した（木村・西本 2019）（二橋他 2023）。この発掘調査の大きな成果として、大天守台西側の内堀内で検出した2条の石列がある（二橋他 2023）（以下「報告書」とする）。

この石列の評価については、発掘調査の成果に加えて絵図等の歴史資料の検討など、総合的な調査研究が必要である。本論は、研究史の再整理も踏まえ、発掘調査成果を含む遺構の検討を行い、今後の総合的な検討にむけて課題を整理するものである。

1　大天守台西側の石列について

石列は、検出された当初から、中井家文書「なこや御城惣絵図」に記された小天守風の建造物[(1)]にあたるものの可能性が検討された。しかしながら、一方でそれを否定する意見も存在する。現時点ではまだ不明な点も多く、それに対する結論が得られるわけではないが、今後の検討を進めていくための基礎的な整理を行う。遺構の詳細な図面等は前掲報告書を参照されたい。なお、本稿は報告を前提とする筆者個人の見解である。

石列は、天守台石垣や内堀の対岸（御深井丸側）石垣の地下部分の状況を検討するため、堀底のレーダー探査、それを踏まえた発掘調査などを進める中で発見された。レーダー探査では、現地表下119cm以下で堀を横断するような溝状の反応が見られた。大天守台北面では、そのような強い反応は確認されていない。この反応が強い部分の発掘調査の結果検出されたのが問題の石列である。石列の概要を報告書の記述に従い、簡潔に整理する。なお、調査目的上、発掘調査は近世面の検出までにとどめている。

〈石列の概要〉

天守台西側の内堀内で東西方向に約26mの間隔を持ち、平行して延びる2条の石列が検出された。北側の石列の石材はいずれも北側に面をなし、南側の石列は南側に面をもつ。

石列を構成する石材は、いずれも築城期と判断している盛土内に設置されているか、その盛土の造成前に設置されており、「構築時期は築城期に近い時期」と判断されている。大天守台西面の直前から、内堀御深井丸側石垣の前面まで内堀を横断するものと想定され、その長さは北が16.0m、南が15.3mである。石列は大天守西面の石垣とは組み合っておらず、また西端は内堀御深井丸側石垣に接していない。いずれの石列も西端で折れるような様子は見られない。

平面的な位置としては、天守台石垣の西面に見られる「切欠き[(2)]」は、この石列のちょうど中央部付近にあたる。

石列は、宝暦期の天守修理の際の整地土とその土に含まれる礫群によって覆われている。報告が述べるように、宝暦修理の際に、堀底も改変されたとみられ、築城期盛土の上位には、宝暦期とみられる層が堆積している。そのため、宝暦期以前の状況は不明である。

2　遺構の検討

ところでこの石列に関して、平行する2条が検出されたことが今回の調査の新知見であるが、この内の一条は、戦後の現天守閣再建工事

図１　内堀内石列平面図（二橋他 2023 一部改変）

に伴うボーリングの際に、天守台西側の堀で確認された、「石垣の基礎と思われるもの」（城戸1959, p.118）である可能性が高い。ボーリング実施地点は、石列が検出された調査地点と一致しないが、各トレンチ内で現天守閣再建時とみられる攪乱が見られ、攪乱が石列にまで達しているトレンチもあることから、石列の存在が確認されたものと思われる[(3)]。

城戸は、その石列を天守周辺の縄張り計画の変遷を示す根拠として理解した。縄張りの計画変更の研究との対比は、西小天守の問題とも関連するため後述するが、まずは、そうした議論に向けて、この遺構に関連する事実を、報告を基本とし、今後のために更なる検討をしておきたい[(4)]。

この石列はいずれも、築城期の盛土内に設置されている。この築城期の盛土は、暗褐色土中に、名古屋城の基盤層である熱田層の土塊を多く含む特徴的なものである。城内の各所で確認されているが、熱田層を大きく掘り下げた内堀内の各トレンチでも確認でき、厳密な同時代性を示すとはいえないものの、築城期に大規模に、おそらく堀の掘削土を用いて整地されたとみられる。

平行する２条の石列が石垣をなす可能性を検討する。各石列の背後（面をなさない側）は、宝暦期と思われる円礫の集積面までの掘削でとどめており、栗石やその背面土等の石垣としての構造を持つのかどうかは確認できていない。この２条の石列の南北の中間地点で東西方向に堀を横断して行ったＧ区においても、ほぼ宝暦期の包含層（（木村・西本 2019）の 10 層）までの掘削としているため、築城期の石列間の堆積状況は確認できていない。石列の背面構造（2条の石垣間の堆積状況）は不明であり、石列間の構造の面からは、これらがそれぞれ石垣の一部かどうかは確定できない。

Ｇ区内サブトレンチ内の 12 層（木村・西本 2019）は、近世包含層の下位で、御深井丸側の石垣面に接していることから、築城期の盛土の可能性があるが、他と大きく異ならない盛土であり、石垣の背面盛土と積極的には言いにくい。

また、この盛土が築城期の盛土であるとした場合、石垣面から 2.5m ほどのところの近世包含層の落ち込みがあるが、Ｗ区、Ｙ区の石材の西端とは一致しておらず、石材の抜取り痕とも考えにくい。Ｇ区内では、石列の存在をうかがわせる痕跡は見られないとしてよいだろう。

報告が指摘するＹ区北側東西トレンチの所見と合わせて、内堀内には、２条の石列をつなぐ南北方向の石列はなかったと判断してよい。

石列と両端の石垣との関係をもう少し検討しておこう。先に、天守台側石垣と近い時期であることを想定したが、両者は組み合っておらず、同時に積み上げられたとする根拠があるわけではない。

Ｘ区においては、天守台石垣直前は石材が２段になっているが、上段の石材は近世の包含層中に埋まっているため、石列を構成するものではないと判断されている。下の石材 X-6 は、天守台石垣との間に約 10㎝の隙間があり、現状では近世の包含層とみられる土が埋まっている。また石材 X-6 の形状が、他の石材とやや異なっていることも指摘されている。

Ｗ区については、石材東端と大天守台の間は 1.5m 程ある。土層の状況から、天守台前面の石材が抜き取られた可能性も想定されており、Ｘ区の状況が本来の姿に近いとみられ、天守台石垣築造後に、それに接するように築かれたものと判断する。

また天守台側において、この石列は天守台石垣とは組み合っていない。このことの検討材料として、小天守との間の橋台の状況を参考に見ておこう。

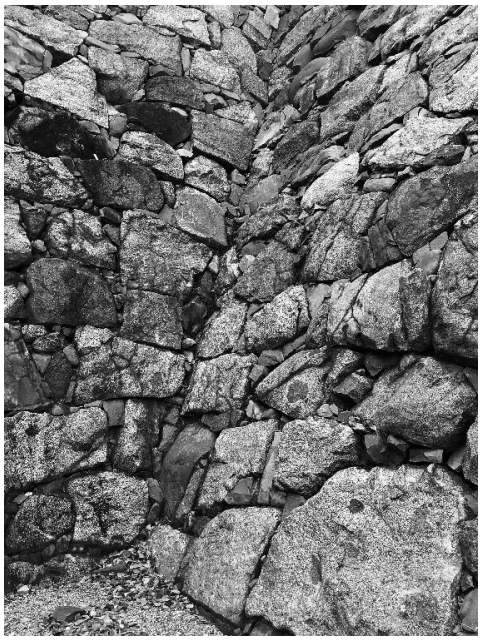

写真１　大天守と橋台東面入隅部
（右：大天守南面、左：橋台東面）
すべて大天守南面が先に築かれる

写真２　大天守と橋台西面入隅部
（右：橋台西面、左：大天守南面）
矢印部分までは組み合い、それ以上は大天守が先に築かれる

橋台と大天守がなす入角部は、本丸側（東面）では先に築いた大天守台の前面に石材を積み上げ、その隙間を角礫等で埋めている状況が確認できる（写真1）。一方で、内堀側（西面）の入角部を見ると、標高 15m 以下の下半部分（概ね大天守台の本丸側石垣の基底部の高さまで）は、それぞれの石垣面の石材が互いに入る部分があり、組み合っているように観察される一方、上半部分については、本丸側と同様、組み合っておらず、天守台石垣の前面に礫を詰めている。

大天守台と入隅をなす石垣面はこのほかに、大天守台東面から東に延びる内堀石垣があるが、こちらも下半部は組み合っていると思われる一方、上半では大天守台石垣の構築後、築いているように観察される。

こうした事実からは、内堀内で天守台と入角をなす石垣面を築く際には、本丸側基底部程度の高さまでは同時に築き、それ以上はまず天守台石垣を積んだのち、接続する石垣を積んだ可能性が考えられる。

また、内堀内に築かれた遺構という点では、不明門北の土橋があるが、こちらの石垣は、レーダー探査の結果から、内堀構築後に築かれていると判断されている（名古屋城 2022）。現地観察でも、東面は内堀に石垣に当てる形で築かれており、西面は濃尾地震により崩壊し積み直されているが、積み直しは内堀内だけで完結しており、堀の石垣とは組み合っていなかったと思われる。

一方御深井丸側については、石材が確認されたのは石垣面より 1m 以上手前までであり、石垣までの間は、石材が本来存在しなかったのか、抜き取り等されたのかは確認できていない。そのため、石列の東西の規模は確定できず、現状の堀を前提とすると最大でも 20m 程度である。

この石列がこれまで述べられたように西小天守の石垣の基礎であったとした場合の検討を行う。切欠きの高さまで積み上げた場合、天端はどのような規模になるだろうか。

二条の石列間（南北方向）は検出面では

26m ほどあるが、仮にそれぞれの位置に石垣が築かれたとし、内堀内から立ち上がる小天守と大天守をつなぐ橋台石垣と同様な勾配で築かれたと考えてみよう。堀底面から橋台石垣上端までの水平距離は概ね 5.5m ほどであることから、この石列の場合に当てはめると、天端の幅は 14m 程度ということになる。なお、橋台の石垣面の基底部付近の角度は、60 ～ 65° 程度で、石列石材の角度の中では上限に近い。

橋台の東側石垣は本丸からたちあがっているが、内堀から立ち上がっていると仮定し、西面の勾配を参考にすると、橋台の内堀地表面レベルでの幅は概ね 20m 程度、上面の幅は 9m、小天守の場合も同様に仮定すると、内堀地表面レベルで南北 30m、東西 40m 程、上面では南北 18m、東西 26m となる。

石列が石垣の基底部付近であり、その石垣の上端の高さが切欠き底部ほどであったと仮定すると、上面の幅は橋台と小天守の中間的な規模になり、南北方向に関する限り小規模な建物であれば設置することができると言えよう。

本丸北辺の不明門北の土橋は、現状の堀底の石垣で幅約 9m、本丸南辺の表二之門南の土橋は約 10.5m であり、検出された石列よりははるかに小規模である。

ここまで述べてきたように、この石列が石垣の 2 辺である可能性は、遺構の平面形態でも、背面構造の面でも明確な根拠は得られない。しかしながら、積極的に否定する根拠もなく、位置関係や規模から考えても、石垣の二辺である可能性は高いと判断する。

3　石列評価の前提―研究史の検討

この石列の評価を巡っては、すでに様々な意見が示されたが、中心はこの石列が、築城期に絵図に示された西小天守のものか等、築城期の縄張りの計画変更に関わるものであった。

本稿も、検出遺構の評価を通じ、その議論に備えることを目的としており、それに向けてこれまでの研究の成果を概観しておく。

この石列については、先述の通り、城戸が「石垣の基礎と思われるもの」（城戸 1959, p.118）と同じものの可能性が高い。城戸がここに「石垣の基礎」を想定したのは、自らが示した本丸の縄張りの計画変更（城戸 1941）があったことを前提としている。城戸は、絵図の分析をもとに、次のように縄張り計画の変遷を述べた（Ⅰ～Ⅴは筆者が便宜上つけたもの、資料名は現在の一般的な名称に改めた）。

Ⅰ　「なこや御城惣指図」（中井正知氏・中井正純氏所蔵）は「由緒正しい信じ得べきものでなければならない」として、創築の計画図とする。当初は天守西側堀を幅広くし、その中に天守西側から続く橋台、櫓（本稿の西小天守）を設ける計画

Ⅱ　「徳川侯爵家所蔵名古屋城古図」、主図合結図が示す通り、櫓を中止して、代わりに枡形を築く計画

Ⅲ　Ⅱの枡形も中止し、天守西北隅と御深井丸は地続きとする、いわゆる丁場割図に示された計画

Ⅳ　天守と御深井丸が地続きでは、防備上遺憾を感じられるので、何時の時にか現状のように、この部分に堀を掘削

Ⅴ　当初計画では小天守南側に存在した小天守登段を北面に変更（現状）

城戸のこのような先駆的な研究を踏まえ、更に詳細に検討したのが内藤昌である（内藤 1985）。内藤は、絵図類を①中井家蔵「なこや御城惣指図」、②「名護屋初築之図」などの兵学図、③「名古屋城普請町場請取絵図」などの普請図、④中井家蔵「なこや御城之指図」に分類したうえで、絵図に示された縄張り等を比較

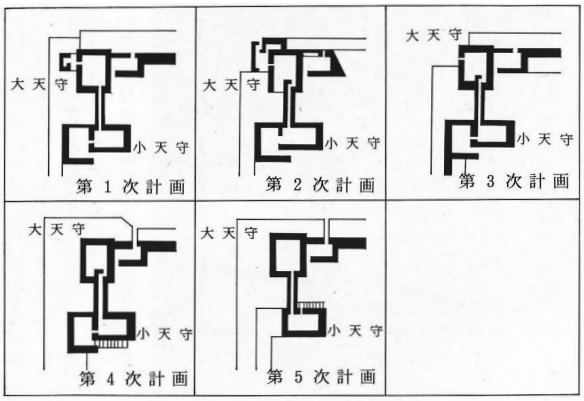

図２　内藤氏の第１～５次計画模式図
（高田 2001 より転載）

検討した。現状遺構との比較の上、①～④をそれぞれ第一次計画～第四次計画とし、現状を第五次計画とする計画変更があったとした。[5]

内藤の変遷観は城戸のものを基本としており、西側に小天守を持つ第一次計画、小天守にかえて枡形を構える第二次計画、枡形をなくし、御深井丸と天守を直結させる第三次計画、天守北西部にも堀を巡らす第四次計画、小天守への入口を北側へと変更した現状の第五次計画であり、その後の研究はこの内藤の５段階の変遷案を基本とすることとなる。[6]

近年になり、第三次計画の根拠資料とされた丁場割図について研究の進展があった。内藤の③を示す資料の中でも、原本と判断される絵図が発見され、新しい知見がもたらされた（及川 2019・2022）（原 2022）。

及川は、靖国神社遊就館所蔵の絵図が、名古屋城公儀普請の際の丁場割を示した絵図のオリジナルであることを示し、これまで知られている絵図はこれを写したものであることを示した。あわせて、原図には色紙を貼るためのヘラの筋が残り、色紙の脱落が確認できること、写しには、脱落が補修されている部分もある一方、脱落のまま写されている場合もあることを示した。原は更に、同絵図の本丸北西部分にもヘラの跡があることを述べ、それを復元すると本来、内藤が第二次計画とした、兵学図に示された桝形を築く縄張りに類するとした。そして、天守北西部に何も築かない第三次計画が存在しなかった可能性を示した。

第三次計画が本来無かったとすることは、検討の当初よりこの計画には防備上の課題があることが指摘されていた（城戸 1941）ことを考えると、妥当であると思われる。以下では、大天守北西部に堀を掘らず、枡形を築く計画として第二次計画と一体として扱う。

こうした縄張計画の変遷は、絵図等の歴史資料の検討に基づいており、実際の遺構等と整合させるため、計画と施工を分けることで説明がなされてきた。この点も整理しておく。

城戸の議論のスタートは、大天守西面に見られる切欠きを、第一次計画に示された西小天守の入口と解釈することであり、西小天守が計画だけでなくある程度実施されたと解釈した。一方で、同じ論文中で「天守西北隅と御深井丸は平地の地続きに完成された」（城戸 1941, p.78）とも述べ、その根拠として、丁場割図に示された間数の合計が、現在の堀の長さより短いこと、堀の外側石垣面に、当初築かれた石垣と、後に堀を掘ったのちに築いた石垣の手法の違いを示す目地が見られることを述べている。西小天守入口を作る第一次計画は、天守北西部の堀を伴う計画であるため、地続きに完成されたことと両立しないが、同文献中で、地続きに完成されたものを堀で囲繞した縄張に変更した修築工事について論じており、実際の施工は、第二・三次計画によると考えていたと思われる。

施工が第二・三次計画に基づく点は、丁場割図の性格上、基本的に後の論者によっても維持されている。後藤久太郎は、「なこや御城惣絵図」で、西小天守のみ名称・規模が記された付箋がないことから、計画で終わり、実際には作られなかったとしている（後藤 1978）。また、当初

は本丸と御深井丸が地続きであったことを示す「石垣を積み足したと見られる部分」（同 , p.63）の存在を指摘する。

内藤も第一次計画は、まったくの計画図に過ぎず、大天守北西部の堀は、慶長十六年から十七年の幕府穴太による普請としている。内藤は、その理由として「泥田に接して構築した」本丸西北部の地盤問題を挙げた（内藤 1985, p.43）。

千田嘉博は 2012 年の段階で、天守台の切欠を西の小天守への出入り口とし、ある段階まで第一次計画によって石垣工事が行われたとする。また、実際の施工では、第三次計画の丁場割図のようなものであったと考えねばならないとし、その後、幕府穴太により小天守西側の枡形をなくす工事と大天守北西に堀を掘る改修がなされたとした（千田 2012）。千田は今回の石列の発見を受けて、第一次計画の「「幻の西小天守」」について、「堀底に西小天守台石垣の基礎石を発見したことで、実際に着工していたとわかった」とし、それは「家康の意思で取りやめたことが確実」、「大天守がそのまま御深井丸に接する設計段階を経て、最終的に現在私たちが知る名古屋城の大・小天守のかたちを家康は選んだ」とした（千田 2023）

高田祐吉も第二・三次計画によって施工されたことについては異論を述べておらず、大天守北西部の改修の施工者は前田利光であったとしている（高田 2001）。

一方、原史彦、服部英雄もいずれも第三次計画とされた丁場割図に基づいた施工を前提としているが、天守台北西部について、一度地続きの状態で築造した後、その下部に石垣を積み足すという改修を行ったことには懐疑的であり、第三次計画の策定後、実際の施工前の短い期間の間に、堀を掘るように計画変更された可能性を想定している（原 2022）（服部 2022）。

これまでの整理により、第一次計画が実際に施工されたのか否か、第二・三次計画に基づいた地続きの案が施工されたのか否かという点に議論があることがわかる。

小天守への入口を変更する第四次計画から第五次計画への変更については、絵図が共通して示す状況と現状が異なること、現天守閣再建時に、西側の入口の痕跡が発見されたことから、改変自体は意見が一致している。その施工について、城戸は「穴蔵の内部では、その跡をのこしているが、外面では、他の部分と一体に積まれて、その跡をのこしていないことから、それはおそらく工事の途中でおこなわれたもの」（城戸 1972）としている。これに対し、高田祐吉は石材に見られる刻印の検討を根拠として、この変更は、加藤清正の築造後、慶長 16 年（1611）、戸波駿河によって実施されたとする。千田は、穴蔵内部の出入口痕に加え、小天守台南西角の角石に刻まれた「加藤肥後守内　南条元宅」の位置から、加藤清正によって完成された小天守台が、慶長 16 ～ 17 年（1611 ～ 12）に幕府穴太により改修されたとしており（千田 2012）、第五次計画の施工のタイミングは議論が分かれる。

天守付近の縄張り計画の変更の議論では、遺構等の具体的な根拠に乏しく、議論が分かれている点がある。次のように整理する。

A　第一次計画の西小天守を一部とはいえ施工したのか、或いは単なる机上の案か。

B　丁場割図（第二・三次計画）を実施に向けた計画とする点は一致するが、実際に、天守北西部と御深井丸を地続きで実際に施工したか否か。第二・三次計画から堀で囲繞する計画に変更されたタイミングは論者によって異なる。

C　小天守西の出入り口については、計画が変更された点は一致するが、改修のタイミン

グと施工者については意見が分かれる。

本論で取り上げた石列の評価に関わるのは主としてＡであるが、Ａは天守北西部での堀の有無にも関わるため、その議論がＢとも関連する。そのため、ここではＡ、Ｂについて合わせて検討する。また、Ｃについては適宜触れることとする。

４　計画変更の根拠検討

天守周辺の縄張り計画変更について、その検討の歩みを見てきた。そこでも言及した通り、実際の遺構の調査が多くなく、文書・絵図等の検討に基づいて議論が行われており、それぞれの見解を裏付ける実際の遺構等の根拠の提示、検証は十分とは言い難い。まず、その根拠とされているものについて検討する。

天守付近の計画変更の根拠として、実際の遺構として示されているのは、次の通りである。

ａ　大天守台西面に残る切欠きの存在は、西の小天守を造ろうとしたことを示す

ｂ　内堀内の石列は、天守北西部が地続きで施工された根拠

ｃ　内堀御深井丸側石垣で確認された目地は、堀を新たに掘削した改修の痕跡

ｄ　小天守南西隅の穴蔵側での入口痕跡は小天守出入口が存在した痕跡

ａの切欠きについては、宝暦期の積み直し範囲内にあり、また戦後の工事による影響も受けているため、遺構そのものは本来のものではない。しかし、これまでの論者の指摘通り、宝暦期以前から存在するものである。絵図上では、第一次計画の西小天守または第二・三次計画の桝形を形成する案において示されており、必ずしも西小天守と直結するわけではない。いずれにしても、石垣の最上部にあるため、これを築いた時点では石垣下部の形状は確定しているはずである。第三次計画を変更して堀を掘った場合には、切り欠きは不要ということになる（原 2022）。

ｂの内堀内の石列は、これまで第三次計画を実施した根拠とした城戸の論があったが、今回の調査で２条存在することが明らかになり、そのような説明の根拠とはなり難いことが確認された。

次にｃは、城戸や後藤が示した内堀御深井丸側石垣に見られる目地らしきものである。

城戸が示した写真（城戸 1941, p.80）は鮮明さを欠き、後藤のもの（後藤 1978, p.48）との比較が難しいが、近い地点を示している。

城戸によると、この目地は「水抜き」の北側にあたるという。「水抜き」は、現在も見られる石樋のことと思われるが、現状では、立面図（図３）に示した通りその位置に明確な目地を認めることができない（名古屋城 2023）。

一方、後藤が示した写真では、遠景ではあるが、右に向かって下がる目地らしきものが確認できる。しかし、現在当該の地点付近には、写真に示された目地は認められず、築石が同一かどうかの判断も難しい。後藤の写真についての情報は現時点で得られておらず、築石そのものが変わっている可能性も想定しなければならない。

いずれにしても、現在の石垣面では、城戸、後藤が示した目地らしき痕跡は確認できない。当該地点付近での現代の積み替えなどは把握できておらず、この間の事情は不明である。

なお、この地点は木子清敬による濃尾地震の記録（東京都立図書館蔵）では、「孕ミ」、「崩壊」とされた部分に近接する。城内で木子がこのように記録した箇所では、概ね積み直しが行われており、「崩壊」の部分に加え、「孕ミ」の部分まで積み直された可能性が高い。現時点では、濃尾地震後の積み直し痕跡を現地の石垣で明確

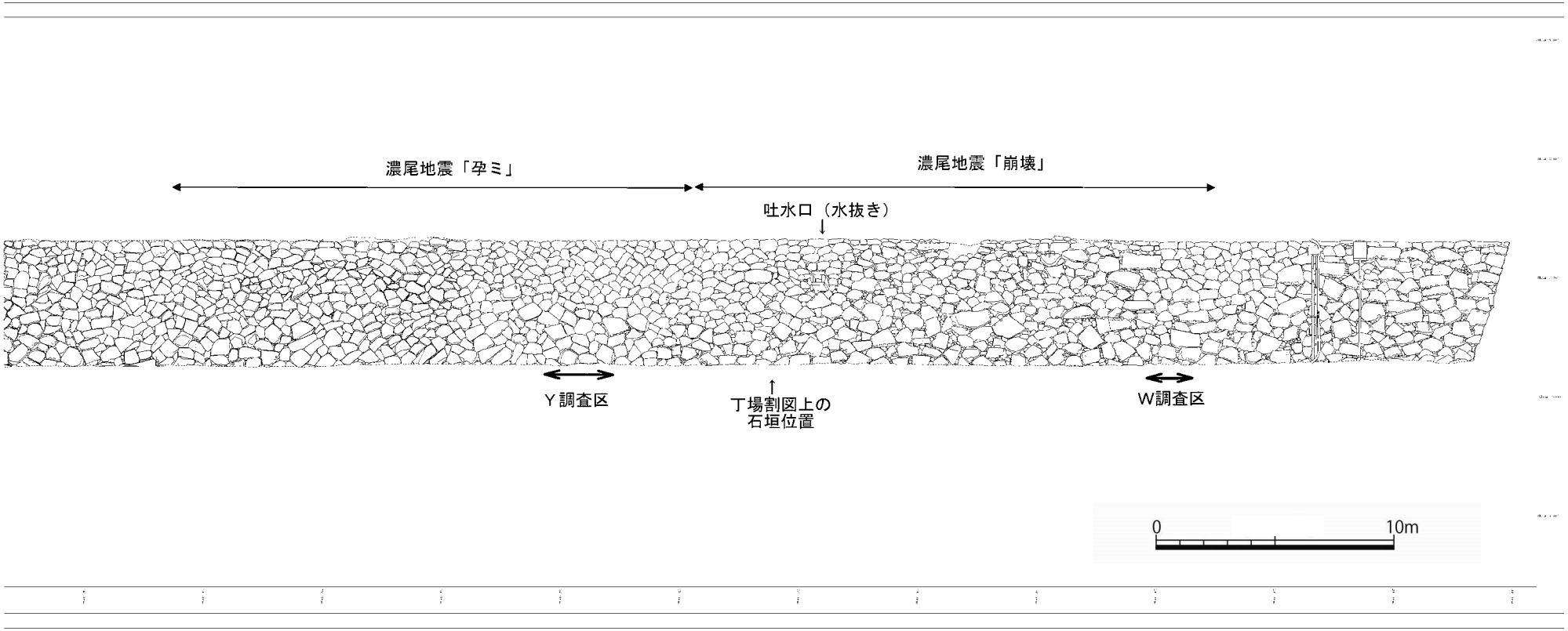

図３　内堀西辺御深井丸側石垣立面図　北部（1/250）

に特定できないものの、図の中で、落し積みで間詰石がない部分は濃尾地震後の積み直しの可能性が高いと思われ、城戸や後藤が目地らしき痕跡を確認したと思われる段階でも、当該部分に近世期の石垣は残されていなかったと考えられる。

また、そもそも城戸、後藤が示した目地らしきものの位置は、南側の石列の検出地点より10m 程北にあたると思われ、石列と関連した目地とみることも難しいように思われる。

すなわち、城戸、後藤が示した目地は、縄張りの計画変更に伴う石垣の積み足しにかかわるものではない可能性が高い。

続いて、本論の趣旨からは外れるが、本丸付近の計画変更という観点から、小天守南西の出入口痕跡も検討しておこう。小天守の穴蔵石垣西辺の当該部分は、天守焼失後の写真を見る限り直線状となっており、近世には出入口痕跡は全く露出していなかったものと判断される。そのため、この部分については、現天守閣再建に先立つ穴蔵石垣修復のための積み直しの際にも手が加わっていないと思われ、戦前の姿＝近世期の姿を残していると判断される。なお、この部分については戦後の積み直し工事の記録写真が残されているが、その際にどの範囲まで石材が変わったのか、明確には確認できない。

また、その出入口痕跡の外面は、大天守台の切欠き部分とは異なり、明確な痕跡を残していない。そのため、外面は完成することなく、一連の工事の途上で計画変更されたとの解釈もなされた。

しかしながら、現在の当該部分の外部石垣を周辺部分まで広げて検討してみると、確かに出入口の明確な痕跡は認められないが、本来出入口部分の算木積みに用いた可能性がある、加工度が高く直線的な辺を持つ石材が平石部に点在している。小天守の平石部では他にあまり確認できない特徴であり、外部石垣も出入口を築き、算木積みがなされたとの想定も可能な状況である。その場合、その改変にあたって、宝暦の改修の時点でも維持された大天守台の切欠きとは異なり、本来の形を残すという意図がなかったことになるが、改変の時期は、「工事中」（前掲城戸 1959）に限ることはできない。

5　内堀内石列の解釈を巡って

以上までに行った遺構の検討と、研究史の再検討を踏まえ、石列をどのように解釈できるかについて整理する。なお、本稿では遺構の議論に集中し、それ以上の解釈・評価は機会を改めることとする。

石列の石垣の築造に先立つ堀の掘削の問題から検討する。

冒頭で整理した発掘調査の成果と、前項のｂ及びｃの検討から、天守台北東部を陸続きに施工した後、堀を掘削し天守台下部に石垣を積み足したと考える根拠は現時点ではない。前述の服部や原が想定する通り、実際の施工の困難さから考えても、施工の当初から堀を掘削したと考えるのが妥当であろう。

次に、内堀に築かれた２条の石列である。天守北西部が地続きに造られたことの根拠とはならないことはすでに述べた通りである。当初から堀を掘削したうえで、平行する２条が築かれたと考えられ、更に大天守西面の切欠きを中心に対称であることや、切欠きの高さでも南北方向には建物を築くことができるだけの天端規模を持ち、土橋などとは明らかに規模が異なることから、何らかの建物の基礎となる石垣の２辺の基礎部分である可能性は高いと考える。

しかし、この石列は天守台石垣とは組み合っておらず、下半では組み合っている小天守につながる橋台や内堀に続く石垣とは異なり、西小天守に対する否定的な論拠となりえる。しかし、

こうした築き方の理由として、橋台の西側入角の状況から推測される天守台石垣の構築段階による違い、すなわち、下半を築造した段階までは、その計画がなく、その後、石垣の上半部を築く段階で築かれたとする説明は有効であろう。その場合は、当初計画は、堀は掘るものの堀内には何も築かないというものになる。

遺構の検討に基づいたここまでの想定は、

①天守台を堀により囲繞する

②大天守台石垣を本丸面の高さまで築造。この時点で、石列は築かれていない。

③大天守西面に石列を築く。

④石列と並行して天守台石垣の上半部分を築造する。大天守台西面最上位には切欠きを造る。この時点で、石列の上位がどこまで築かれたかは不明。

⑤西側の構造物築造中止

遺構の検討からは、石列の構築を上記のように整理すると、確認した事実と整合的な説明とはなる。これに当てはまるものを既知の絵図資料に求めるならば、現時点では第一次計画の西小天守のみが候補となる。しかし、問題となるのは石列の東西方向の規模である。内堀の幅が現状である限りは、東西方向は20ｍを超えることができない。

本丸西辺の内堀は、いずれの絵図でも南北が一直線で描かれているが、そのような形状とすると、西辺の中央付近で水堀が大きく入り込んだ「鵜の首」がある以上、内堀にこれ以上の幅は期待できない。内堀の北西部が当初幅広く計画されたとする根拠は、絵図上だけでなく、遺構上にも現状はない[(7)]。とすると、堀を掘削した時点で規模的に築造が困難なことが明らかな西小天守を、あえて築造し始めたことになり、説明としては難しいものになる。

６　縄張り計画の変遷についての予察

さて、以上まで検討してきたことを踏まえると、今回検出された石列の遺構からの検討を、絵図などの情報と整合的に理解するのは難しい。また遺構の検討からは、城戸に始まる天守付近の縄張り計画の変遷もあわせて再検討する余地があるように思われる。

すなわち、石列が仮に第一次計画に表現された西小天守であっても、それとは関連しないものであっても、遺構の構築状況は今回の検討の通りとならざるを得ず、いずれも城戸に始まる天守縄張りの計画の変遷とは一致しない。

すなわち、西小天守でないとすると、絵図資料上は未知の構造物が施工されたことになり、現在の計画変遷案そのものが成立しない。

一方で、第一次計画の西小天守の基礎の一部だとすると、第一次計画としてその計画があり、実際にそのように施工されることになるにも関わらず、第二・三次計画として大天守と御深井丸を地続きとする丁場割がなされたことになる。

また、計画変更の順序についても、具体的な遺構の上では確認できないことが多いことは述べた通りである。

こうした遺構の状況と、計画変遷が矛盾する原因の一つは、本来、目的や性格の異なる丁場割図や中井家伝来の絵図類を、計画の順序として、一連の流れの中で理解しようとすることにもあるように思われるが、この点については、本論の趣旨を超えるため、今後の検討課題としておく。

また、こうした説明のつかない事象に対し、これまで知られる絵図にはない構築物が築かれた可能性や、記録にない計画変更なども想定すべきではあるものの、まずは、遺構の面でも、歴史資料の上でも、根拠のある議論を進められるよう、現在ある情報をより整合的に理解する

ことを目指して、今後計画している総合的な天守台石垣の報告書に取り組みたい。

〈参考文献〉

及川亘 「靖國神社遊就館所蔵「なごや御城石垣絵図」について」『東京大学史料編纂所付属　画像史料解析センター通信』第87号　東京大学史料編纂所　2019

及川亘 「「名古屋御城石垣絵図」を読む」『資料が語る　名古屋城石垣普請の現場』 名古屋城調査研究センター　pp.45-71　2022

城戸久 「名古屋城本丸創築縄張に関する一知見」『名古屋高等工業学校学術報告』第7号　名古屋高等工業学校　pp.73-82　1941

城戸久 「名古屋城築城の経過と規模」『名古屋城史』 名古屋市役所　pp.74-135　1959

城戸久 「名古屋城本丸天守の配置について」『城と民家』 毎日新聞社　pp.213-225　1972

木村有作・西本茉由 『特別史跡名古屋城跡　天守台周辺石垣発掘調査報告書』 名古屋城総合事務所　2019

小寺武久 「名古屋城の土木と建築」『新修　名古屋市史』第三巻　pp.108-133　名古屋市　1999

後藤久太郎 「名古屋城大天守・小天守」『日本建築史基礎資料集成』十四　城郭Ⅰ　pp.59-77　中央公論美術出版　1978

千田嘉博 『天下人の城－信長から秀吉・家康へ』風媒社　2012

千田嘉博 「西小天守「幻」にする決断」『読売新聞』2023年11月16日朝刊　2023

内藤昌 「名古屋城の歴史」『日本名城集成　名古屋城』 小学館　pp.34-60　1985

名古屋城総合事務所 「御深井丸側内堀石垣の保存対策について」『特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会第48回資料』 2022

二橋慶太郎他 『特別史跡名古屋城跡　本丸内堀発掘調査報告書』名古屋城調査研究報告5　埋蔵文化財調査報告書4　名古屋城調査研究センター　2023

服部英雄 「名古屋城の築城」『史料が語る　名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究報告3　資料調査研究報告書1　pp.21-42　2022a

服部英雄 「名古屋城築城考・普請編」『名古屋城調査研究センター　研究紀要』第3号　名古屋城調査研究センター　pp.5-49　2022b

原史彦 「天守台の設計変更」『資料が語る　名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究報告3　資料調査研究報告書1　pp.62-65　2022

注

（1）ここでは仮に、現在しばしば言及される「西小天守」という名称で表すこととする。

（2）大天守台西面上端の目地は、これまで「水抜き」「塞込部」など様々な名称で呼ばれてきたが、ここでは「切欠き」で統一する。

（3）城戸が確認したのは南側の石列と考えられるが、南側石列の検出地点は実際のボーリング実施地点とは一致しない。

（4）発掘調査以外の各種石垣調査の成果に関しては、現在総合的な報告書を作成中である。

（5）内藤が述べる通り（内藤1985）、（城戸1941）段階では、「なこや御城之指図」の「現実性を十分に確認できない時代的な制約」があったため、Ⅳの記述が曖昧なものとなっている。

　なお、内藤の検討は、絵図に示された名古屋城全体の縄張りや遺構の配置を比較対照する包括的なものであるが、ここでは天守台周辺の議論のみを取り上げている。

（6）以下では城戸の論考に触れる際にも便宜的に内藤が用いた第〇次計画と表現する）。後述するように、この一～五の順の再検討は必要である。

（7）今後の調査により、石列の西端が御深井丸側石垣によって切られているような状況が確認できれば証拠となろう。

《Title》

Discussion over the stone rows discovered next to the foundation of Oo-tenshu（the Large castle tower）

《keyword》

Nagoya castle, stone walls of the castle tower, the western small castle tower, alteration of the layout of the inner citadel